限りある資源を大切に！「広報あしや」はリサイクル古紙を使用しています。

谷崎潤一郎記念館の催し

問い合わせ　谷崎潤一郎記念館　☎23-5852/FAX38-3244
（〒659-0052　伊勢町12-15）

谷崎潤一郎生誕祭 第21回 残月祭

谷崎潤一郎が愛した地歌「残月」にちなみ、華やかなことが好きだった谷崎をしのんで、毎年、谷崎の誕生日である七月二十四日に「残月祭」を開催しています。

今回は、作家・田辺聖子氏を迎え、芦屋を舞台とした『細雪』の世界～「おんな文化」の怪しさと面白さにとりつかれた谷崎～について、河内厚郎氏と対談していただきます。

田辺　聖子氏

参加ご希望のかたは、往復はがき（一枚で一人）に、住所・氏名・電話番号を記入し、谷崎潤一郎記念館へ。

順次、入場料（三千円）振込みのご案内をお送りします。なお、定員六百人になり次第締め切りますので、ご了承ください。

■**日時**　七月二十四日（火）
午後一時三十分～三時三十分
＊開場・午後一時

■**会場**　ルナ・ホール

■**内容**
《第一部》―地唄「残月」―
地唄三絃・藤井泰和／箏・田中佐和
《第二部》―対談―
『細雪』の世界」
田辺聖子氏／河内厚郎氏

■**残月祭専用電話**　☎二三・〇〇三九

【ロビーギャラリー】篠原奈穂子イラスト展　空気色 Ashiya Version

■**期間**　6月20日～7月1日＜月曜休館＞午前10時～午後5時（最終日は午後3時まで）　■**内容**　「空気色 Ashiya Version」をテーマに、芦屋の街のなにげないシーンを、透明水彩で表現した篠原奈穂子のイラスト作品展　■**入館料**　300円

【ティータイム講座】 作家と楽しむ読書会

■**日時**　6月28日（木）午前10時30分～正午　■**会場**　谷崎潤一郎記念館講義室　■**定員**　20人　■**内容**　作家・柳谷先生と一緒に、宇野千代作「おはん」を楽しむ　■**講師**　柳谷郁子氏（同人誌「播火」主宰。著書「風の紋章」「夏子の系譜」ほか）　■**受講料**　2,300円

【ティータイム講座】 短　歌　講　座

■**日時**　7月10日・8月21日・9月11日（火）午前10時30分～正午　■**会場**　谷崎潤一郎記念館講義室　■**定員**　20人　■**内容**　作歌の基本から現代短歌鑑賞まで。初心者のかたも楽しく学べます　■**講師**　兵庫県歌人クラブ代表・楠田立身氏（現代歌人協会会員。歌集『象』『武者返し』『津森村』『月』ほか）　■**受講料**　1回・3,000円（3回分前納・8,000円）

【谷崎文学朗読会】「源氏物語」朗読シリーズ　第6回「空蝉（うつせみ）」

■**日時**　6月23日（土）午後1時30分～3時　■**会場**　谷崎潤一郎記念館講義室　■**定員**　30人（要予約）　■**内容**　谷崎潤一郎「谷崎源氏」の朗読　■**朗読**　朗読グループＲＳＴ・一花泰子氏、松之内令子氏　■**参加料**　1,000円（入館料・ドリンク代含む）

市制施行50周年記念写真集「芦屋のうつりかわり」を頒布

「芦屋のうつりかわり」
21.6cm×30.5cm／135頁／
紙表紙・銀箔押し（ハードカバー）
頒布額　500円

写真でみる芦屋の歴史

市制施行50周年（平成2年11月10日）に発行した記念写真集「芦屋のうつりかわり」の在庫本を、行政情報コーナー（市役所北館1階）、ラポルテ市民サービスコーナーで頒布しています。

六麓荘住宅地案内

問い合わせ　広報課　☎38-2006

●「広報あしや」バックナンバーは、市ホームページ『広報あしや ON LINE』でご覧いただけます。

あしやの民話⑫ ホタルがり

●文・三好美佐子さん
●絵・竹本　温子さん

あしやは、むかしからホタルの名所やった。芦屋川や宮川は、むかしからきれいな水の流れで、ホタルにとって、住みよいところやった。

そのころホタルは、川原や川岸だけでなく、農家の庭先や、家の中まで入ってきたそうな。

子どもたちは、そんなホタルをササの小枝で追いまわして、遊んだそうな。

夏の夕べは、おとなにとっても、子どもにとっても、ホタルで楽しかったやろ。

夕方になった。

「晩ご飯すんだら、みんなして、ホタルがりに行こう」

父さんが言うた。

「わぁい」

ゆみは、大声で喜んだ。

晩ご飯がすんで、あやめもようのゆかたを着せてもろて、赤いはなおのげたをカタカタと鳴らしもって、ゆみは、父さんと家を出た。

歩きながらゆみは、きょう、友だちから聞いた話をした。

「よっちゃんは、芦屋川のずうっと奥のほうで、まりになったホタル見たんやて。すごいそうよ。三夜しか見ることができんのやて。

それは、きのうの話やから、ひょっとしたら、きょう、見られるかもしれへんなあ。」

父さんは、だまって聞いていた。きっと今から、そこへ行くのかもしれへん。ゆみは、急に胸がドキドキしはじめた。

あたりは、暗くなってきた。ゆみの足は、勝手に芦屋川に向こうていた。

そんなゆみに、父さんは、

「あわてんでもええ。ホタルは、逃げて行かへん」笑いながら、そう言うた。

芦屋川につくと、人かげがいっぱいやった。

あっちでもこっちでも、ちょうちんのあかりがゆれている。

あとから、やってきた太一が、「ほっほっ、ほーたるこい」大声で言うた。そばの母さんが驚いて「そんな大きい声だして、ホタルがびっくりするがな」と小声でいうた。

四人は、手にしたササの小枝で、川原の草々を払いもってホタルを探した。

まわりに、また、人が増えてきた。どこからか、子どもの歌う声が聞こえてくる。

ほっほっ　ほうたるこい。
あっちのみーずは　にーがいぞ。
こっちのみーずは
あーまいぞ。
ほーほー　ほうたるこい。

そんな声のする方から離れて、父さんは、どんどん歩いていく。

「父さん、そんなに早く行かんといて。」

前を早足でいく父親を、ゆみは走って追いかけた。あたりの暗さがこわかった。

川の奥の方にさしかかると、さすがに人かげはなくなっていた。

そこは、もうおとなの背ほどの草むらが続き、草を払いのける音だけが響いた。

急に、川原の草がぽっかりとあき、しばらく、

二人は黙って歩いた。

目の前に、空間が広がった。

何とそこに、数えきれないほどのホタルが群れをなしていた。右に、左にと、青白い尾をひいて、飛びこうている。

そんなホタルが玉になりだした。大玉や小玉になっていく。そして、その玉は、ぶつかり合いをしはじめた。はげしいぶつかり合いである。

そのうち、いくつかの玉は渦になりはじめた。

青、白、黄色に混ざり合った、まばゆいばかりの大きな渦巻きは、小さな無数ホタルの羽をとばしながら、もっと強くぐるぐるとまわりはじめた。

それはこの世ならぬ光であった。

いつの間にか、母さんも、太一も、その光景に見入られたようにたたずんでいた。

父さんとゆみも、われを忘れて光の中にいた。そこだけが、夢の世界であった。

その夜、父さんが言うた。

「こん夜、ホタルの群れに出会えて幸せやったなあ。ホタルが、まりのようになってぶつかり合うとったやろ。ホタル合戦というのやそうな。

それは、あしやに住んでた在原業平という昔の歌人の魂が、ホタルになって乱れ飛ぶと言い伝えられているんや。

業平というと、町の名前になってたり、橋の名で知られているやろ。その人の名前からとったんや。業平は、きっとあしやの人に、自分のことを忘れんといてほしいと思て、ホタルになってぶつかり合うているのかもしれんな…」

ホタルの名所であったあしやの川。

今、ホタルは、芦屋川の上流でしか見ることはできないし、名所であったことも忘れられている。

ホタルよ、ホタル。
ほっほっ、ホータルこい。

●「あしやの民話」は、芦屋に語り伝えられていたお話を、三好美佐子先生をはじめ、民話を研究するグループの皆さんが収集整理して、やさしく民話の形に整えられ、平成十一年に発行されたものです。